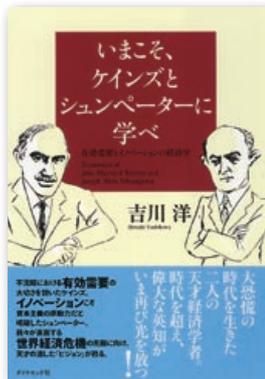


書籍紹介



吉川 洋 著
ダイヤモンド社 刊

「いまこそ、ケインズとシュンペーターに学べ —有効需要とイノベーションの経済学—」

サブプライムローン問題や、リーマンブラザーズの破綻以降、世界的な不況が進行する中、再び注目を集めている経済学者、ジョン・メイナード・ケインズ。一方、ケインズほど有名ではないものの、「イノベーション」という概念を中心として経済学理論を打ち立てた経済学者、ヨーゼフ・アロイス・シュンペーター。

本書は同じく1883年に生まれた20世紀前半を代表する二人の偉大な経済学者、ケインズとシュンペーターの生涯及び経済学における彼らの仕事(主な著書)を時系列に沿ってわかりやすく紹介するもので、数式が多数列挙されるような専門書ではないため、ケインズ及びシュンペーターの経済学に触れてみたいという方にお勧めの一冊です。

何故、ケインズとシュンペーターに注目する必要があるのか。著者である吉川洋氏(東京大学大学院経済学研究科教授、元経済財政諮問会議民間議員)は、ケインズとシュンペーターが描いた「ビジョン」は、いまだに経済を見るときに不可欠の視点を提供しており、二人の経済学が不況下の我々に導きの糸を与えてくれるものであると述べています。

◆ケインズの描いた「ビジョン」

著者によれば、ケインズの成した仕事のうち最も重要なものは、「有効需要の理論」だそうです。ケインズの「有効需要の理論」のエッセンスは、一国経済全体の活動水準は、生産要素がどれだけあるかとか、技術水準がどれくらいであるかといった供給サイドではなく、需要の大ききで決まるものであり、需要が少なければ生産水準は低くなり、言い換えれば不況は需要不足によって起きるというものです。そこでケインズは、不況時には需要不足の解消のために、政府による公共投資の重要性を主張しますが、同時に公共投資がWise Spendingである必要性についても言及しています。

◆シュンペーターの描いた「ビジョン」

筆者によれば、シュンペーターの描いたビジョンは、「イノベーション」と「創造的破壊」によって言い尽くされるとのこと。シュンペーターの言う「イノベーション」とは、1.新しい商品の創出、2.新しい生産方法の開発、3.新しい市場の開拓、4.原材料の新しい供給源の獲得、5.新しい組織の実現、この5つの概念を含むものです。ここで、シュンペーターは、イノベーションを遂行する人を「企業者」と言い、企業者を動かす動機として「私的帝国」ないし「自己の王朝を建設しようとする夢想と意思」、「勝利への意思」及び「創造の喜び」の3つを挙げますが、著者はこのような企業家精神をデュオニソス的であると解説します。そして、シュンペーターは、企業者が遂行するイノベーションによる非連続的な変化(例: 駅馬車から自動車への変化)により経済が発展することを主張し、そのような新陳代謝のプロセスを「創造的破壊」という言葉で表現します。

本書には、ケインズとシュンペーターの経済学上のビジョンのみならず、1929年の世界大恐慌に対する二人のリアクション、人口減少と経済についての二人の考え、二人の日本に与えた影響などについても紹介されています。

知財に日々携わる者としては、シュンペーターのイノベーションこそが経済発展の動力であるとするビジョンは非常に興味をひかれるところですが、そういったシュンペーターの供給サイドから見た経済学と併せて、有効需要(需要サイド)に注目するケインズの経済学を知ることで、経済を見る上で必要な視点が得られるのではないのでしょうか。

紹介者 特許審査第三部医療 岡山 太一郎